特別支援学校における俳句創作学習指導の研究

―認知特性を踏まえた個別最適化の創作指導―

植山俊宏、深田菜々子、坂野来夢、両角晶一郎

（京都教育大学・京都教育大学附属特別支援学校・京都教育大学大学院連合教職実践研究科大学院生・京都教育大学大学院連合教職実践研究科大学院生）

A Study of Haiku Creation Instruction in Special Needs Schools -Optimization of Individualized Instruction for Creative Haiku Writing Based on Cognitive Characteristics－

Toshihiro UEYAMA・Nanako HUKATA・Raimu SAKANO・Syoitiro MOROZUMI

2024 年 9 月 30 日受理

抄録：特別支援学校における俳句創作学習では、創作に取り組んだ生徒たちの自己肯定感、自己有用感などの精神面の向上が見られた。そこにはある種の強い認知特性が働いていることが推測された。その認識特性の働き方をとらえることで、内面的な精神活動と俳句創作活動との有機的連関がとらえられると考えられる。本稿では部分的ではあるがその成果をとらえることができ、今後の研究の展望を開くことができた。

キーワード：特別支援学校生徒、俳句創作、言語創造、自尊感情、自己肯定感、認知特性、個別最適化

Ⅰ．問題の所在

特別支援学校生徒の俳句創作には特徴的な様相が現れる。名作志向、被評価意識、学友へのライバル意識、義務的創作意識などが皆無か希薄という特徴が見て取れる。しかし、これらは外見的、指導者側の把握であり、生徒個々の俳句創作の意識につながる内面の動きを捉えたものとはいいがたい。俳句創作活動を観察した場合の結果を集約にしたにすぎない。なぜ彼らは俳句を創作するのかという根本的な問いに答えてはいないし、その問いの解明にアプローチできるとも思われない。1)2)

彼らの創作の特徴には、何ものかに対するかなり強い志向性が認められる。外的な視線を顧慮しないという点で、内面におけるあるものへの志向、執着、欲望などの存在が垣間見える。これを認知特性という特徴だと考えると、あるものを強く認知し、それを取り込み、俳句創作という言語活動へと転換させていく過程が想定される。

Ⅱ．俳句創作活動の特徴と教育的価値

1．俳句創作における精神的な負担

俳句という短詩形の定型詩は、世界で最も短い詩といわれるように、創作においては、他の文学ジャンルに比して、初歩的には操作の手間は大きなものではないし、精神的負担も少ない。作品価値や質の深化についての探究という高度なレベルを目標としない限り、いわゆるお手軽でハンディな文学創作ということがいえる。このことを文学行為という視点から見ると、俳句という文学の重要性の追求を放棄したとみられる可能性は高い。だが、文学の日常化という点から見ると、高みよりも広がり、裾野を希求する意味で一定の成果は認められる。

2．俳句の特徴

（1）俳句の音律が導く詠者の生活の投影

定型の持つ一つの大きな機能として、音律が挙げられる。俳句の５・７・５の音律は、記憶の容易さという点で説明できるが、口誦性、つまりくちずさみやすさの点でも特徴的である。５・７・５の定型の創作に慣れてくると、創作量、創作速度が増してくる。句の優劣という視点を放棄すれば、親近性は創作意欲の大きな基盤となる。少し乱暴に写真撮影に例えてみると、定型というカメラを入手し、使いこなせるようになると、撮影した写真（俳句作品）の数は増えていくことになる。これは、自分の周囲のさまざまを被写体にするので、撮影者（詠者）自身の生活の多くの場面が投影されることになる。俳句の場合は、それは単なる記録写真にとどまらない。

（2）俳句の持つ虚構性がもたらす恩恵

一般的に写真の場合は、非現実という壁は越えられないが、ことばによる創作である俳句は非現実を超えるところに意味がある。現実に存在しないものを俳句の世界に存在させるのである。実在しないものを現前させる力は文学一般に認められているが、俳句の場合は、初歩的にはそれが極めて容易に、気軽に発揮できる。いわゆる文学の虚構性だが、この機能を使いこなすと、現実世界に加えてもう一つの世界を創造することが可能になる。しかし、それは単なる脳内の想像ではなく、言語形象、ことばという形が与えられることで不安定さ、恣意性などの問題の多くが解消される。自分で自己流に記号を作って、その記号による創造物を作品とするのではなく、社会的に共通の記号とされる言語、日本語を用いて、自分はもちろんのこと、他者による理解を前提とした創作を行う。虚構性を前提とした創作は、同様に虚構性を前提とした理解を実現する。「ありえない」ではなく、「あったらいい」世界を創作し、それを共有することになる。

（3）虚構の共有により生まれる共感・共感と「ずれ」

虚構の共有に関しては、つきつめれば「共有」なるものは存在しない。等値という意味では創作者と理解者の間に意味は「共有」されない。創作者が思い浮かべて、俳句という作品に創造したものが、その「思い浮かべ」たまま伝わることはない。これは、言語一般にいえることではあるが、俳句の場合は、表現量が極めて限られているため、この「共有」がずれることが多々あり、時として大きく意味を変えて受け止められることがある。危険なことのようだが、俳句がもともと「片言」的であることを認識していさえすれば、まず「共有」が図られ、共感、共鳴を呼ぶ。「共有」がうまく行かず、例えば同じ情景が思い浮かべられなくても、理解者が示す情景に一定の合理性があると認められると、その「ずれ」は、楽しめるものになる。

（4）句会という「共有」の場とその教育性

「共有」の場となる句会について考えてみる。句作は、単独、個別に行われることもあるが、しばしば句会という独特の場を設けて俳句創作が行われる。教育的な俳句創作活動は、ほぼこれに当たる。創作者が同じ時空間で俳句を作り、それを他者に公開し、意味を共有しあったり、解釈を出し合ったりする。ライブが特徴である。教育的な創作活動がこの形をとることが多いのは、創作意欲、他者への意識、公開への緊張感、期待感などの精神的な作用が大きく働くからである。この精神状態は、よほどの熟達者でない限り、自分で作り出すことは難しい。句会が開かれるのは、集団活動でこの精神状態を確保するためである。

Ⅲ．言語の持つ認識機能と自己統制機能との関係

1．認識機能

（1）認識機能の事例

言語の持つ認識機能は、基本的には命名などに現れるように、言語の使用主体と対象事物の関係を明確にする

ことにある。これは理性的な面であるが、感性的な面にも発露が見られる。岡本は、以下のように述べる。3)

ことばの共有

四年間、私は養護学校につとめたことがある。その在任中の最後の卒業式のことである。

小学部、中学部、高等部の各卒業生はひとりひとり登壇して卒業証書を受け取る。名前を呼ばれ、返事をして進み出、左右に頭を下げ、壇上に登り校長に一礼して、頭を垂れたまま証書が読まれるのを聞く。両手で受け取り、一礼して壇を降り、ふたたび左右に頭を下げ、席にもどる。人びとの見守るなか、これはかれらにとってかなりむずかしい。また子どもによっては身体的にも苦しい一連の行動である。

しかしそれをやり遂げることは、ひとりひとりの子どもにとって、まさに自己の成長を確認する「精神の儀式」なのである。今日の学校で、一般に卒業式はほとんど形骸化し、子ども自身なんの感銘をももよおさぬ行事になり下がっているなかにあって、障害児にとって、その父兄にとって、また、それを見守ってきた教師にとって、卒業式は喜びと、新たな未来への不安を一つにこめた祈りの場なのである。

式場にしつらえられた体育館の冷えこみと緊張に、子どもたちは顔をこわばらせながらも、ビバルディの「四季」の流れるなかをひとりひとり壇に上がってきた。私は証書を読みあげて渡すとき、「おめでとう」といいながら、かれらの手を握った。なかには「ありがとうございます」と声をはり上げる子もあった。

そうしたなかで、中学部の卒業生のなかに、登壇があやぶまれる生徒のひとりがあった。自閉的傾向が強く、三年前の小学部の卒業式では登壇せず、私がフロアーへ降りて証書を渡した子だった。しかし、彼はいま、ひとりで壇を上がってきた。私はやや声を早めて証書を読みはじめたが、その間、彼は何かひとりごとを盛んにつぶやくようであった。彼は日頃から反響語やひとりごとをくり返す癖があった。しかし、やがて、いま彼がつぶやいているのが「どうもない、どうもない」というくり返しであることが私に聞こえてきた。

身を洗われるような感じが私を走った。その子は、集団行動に加わるのを恐れるときや、プールに入ることができないとき、先生や友だちからはたえず「どうもない、どうもない、やれ、がんばれ」と事あるごとにはげましつづけられてきたのである。おそらく「どうもない」という語は彼がもっとも多く周囲から投げかけられてきたことばであろう。前日までの卒業式の練習でも、登壇をひるむ彼を、先生たちは「どうもない、どうもない、上がれ」と叱咤激励してきたのである。

そのかれが、今、私の前で日頃皆から言われてきたことばを、自分で用い、自分で自分をはげましながら、必死に不安にたえようとしているのであった。それはもはやたんなる反響語ではない。外から人によって与えられてきたことばを、わがものとして、自分を支える契機としていま使っているのである。ことばの獲得とは、まさにこういう過程をいうのであろう。

私は気づいた。そのことばはまた、自分も幼い日々、先生や親たちから、たえずかけられてきたことばであったことを。

さらに思った。自分もまた、これからは苦しいときや恐ろしいとき、「どうもない、どうもない」ということばを使うことによって、自分を勇気づけていきたいと。

私たちが語りかけることばを、子どもがわがものとし、かれらがそれをつぶやくようになる。そして私たちがその彼らのつぶやきをあらたにわがことばとしてつぶやきなおしてみる。そこに相互の深い理解が生まれ、ことばは真に私たちの共有するものとなるのではなかろうか。

(2) 人間の行動を支える認識機能と人間の欲求・願望を推進する機能

この例は、形骸化した一般の学校の卒業式に対して、養護学校（当時の呼称）のそれは実質的な目標とされ、

その達成に向けて、自力で行動することの尊さについて述べている。その中に分け入ってみると、ある卒業生の「ひとりごと」が「自分を支える契機」となった事実が示され、それが本人の努力、周囲の支えや励ましによってなされたことが見えてくる。最も注目すべきは、本人の努力がことばの獲得であったことである。単に語彙を習得したのではなく、ことばを使って、自分の行動を方向付け、実現を可能にしていった。克服すべき課題に対して「勇気づけ」るために自身に対して状況を「どうもない」と言い聞かせることにより「自分を支える」手立てを獲得している。非認知能力の視点から見ても、言語学習が自己の精神面を支え、行動を可能にしてする働きをしていることが分かる。状況に対する認識機能としてのことばの働きを十分に活用し、課題を克服しているのである。認識機能がそれを獲得した人間にある能力をも併せて習得させていく姿としても受け止めることができる。

だが、ここで人間の行動の本質を考えてみると、単に課題を克服するためだけに行動しているだけでないだろう。本文中にある「必死に不安にたえ」るためというある種の困難に対する方策としてだけではあるまい。人間は遠くにあるものに対する欲求や願望によっても行動する。行動について簡略に二分法的な把握にとどめるが、前向きな行動を推進するためにもことばは用いられるはずである。この視点からの考察も必要だと考えられる。

Ⅳ. 言語学的な視点からみた俳句創作

1. 記号論的視点からの説明

ここでは、俳句創作を詩創作に含めて扱うことにする。言語学者の池上嘉彦は、「記号」という視点から詩創作を次のように説明している。4)

> 「なぜ詩を作るのか」という問いに対して、ある詩人は「日常の言葉の記号性を打破するために」と答えている。日常の言葉では、語形と語義の間に、慣習によって定められた結びつきができあがってしまっている。日常の言葉を使っている限り、我々はすでに多く惰性化した日常の言葉のきまりの上に成り立つ日常の世界の中で、これまた惰性化した営みを繰り返すだけである。詩人の意図しているのは、この惰性に揺さぶりをかけるということである。既成の語形と語義の結びつきをずらしてみる。例えば、「焔のつらら」のような比喩はその一つの場合であるが、その意味で詩作は、新しい「記号」を生み出す営みである。そして、その新鮮な言葉遣いの創り出す意味を、日常の世界を超えるための踏み台とするわけである。

池上は、記号論という立場から詩作の説明を試みているが、立ち位置としては「日常の言葉を使っている限り」「惰性化した営みを繰り返すだけである」という位置に立っている。「詩人」は、「この惰性に揺さぶりをかける」とし、詩創作が行う「新鮮な言葉遣いの創り出す意味」によって「日常の世界を超える」ことを期待している。俳句という形式は、ここでいう日常性と共存しているものでありつつ、惰性を揺さぶることを本義としている。基本的には日常的な言語を用いるが、「語形と語義の間」の「慣習によって定められた結びつき」をずらしたり、崩したりする。この日常的な言語を用いるところに教育的な機能が認められる。あるものを学習するために必要な語彙を獲得するところから始める必要はない。日常の中からことばを創造していくのである。

2. 言語創造の働き

池上は、「言語創造」の働きについて、次のように言う。5)

> 「言語創造」というと何か大変崇高なことに聞こえるが、実はこのような「言語創造」は、人間であれば誰しもが絶えず行っていることである。朝の小鳥のさえずりに楽しい一日の予告を読み取ったり、一枚の葉の落ちて

いく様子に天下の秋を知ったりする時、そこでは「記号」が創り出されている。人間は、すでに慣習的に定められた「記号」をあやつるばかりでなく、新しい「記号」をせっせと創り出しているのである。（中略）

このように考える場合、いちばん基本になることは人間の「意味づけ」とでもいった行為―つまり、あるものにある意味を付したり、あるものから意味を読み取ったりする行為―である。人間が「意味あり」と認めるもの、それはすべて「記号」になるわけであり、そこには「記号現象」が生じている。この「言語創造」にも似た行為を、人間は絶えず、しかもその文化のあらゆる面で行っている。（中略）人間の「意味づけ」する営みの仕組みと意義―その営みが人間の文化をいかに生み出し、維持し、そして組み変えていくか―現代の記号論はこういうところに関心をもっていると言いかえてもよいだろう。

この創り出される「記号」を俳句に置き換えると、俳句の持つ創造性が理解できる。日常世界を新しくとらえなおし、言語創造という形で表出することによって、日常の世界を超えていくことができると考えることで、虚構性を強く持つ俳句が新しい世界の創出に機能するといえる。

ここでは「小鳥」と「一枚の葉」という、いわゆる花鳥風月の例が挙げられているが、日常生活の惰性を揺さぶり、そこから抜け出すためにはむしろ日常的な事実、事物の再発見、再把握が望ましい。日常生活を俗世として扱い、花鳥風月の世界を尊んで静清を求め、それを創作するのは、ステレオタイプの文学になってしまう。まさに「固定性」を惹起してしまう。俳句が文化という性格を帯びているとすれば、その文化を成立させる条件として定型と音律、そして共有の大きな可能性、さらには「ずれ」を認め、楽しむ仕組みがそれに当たるだろう。

3. 俳句における表現者の志向性

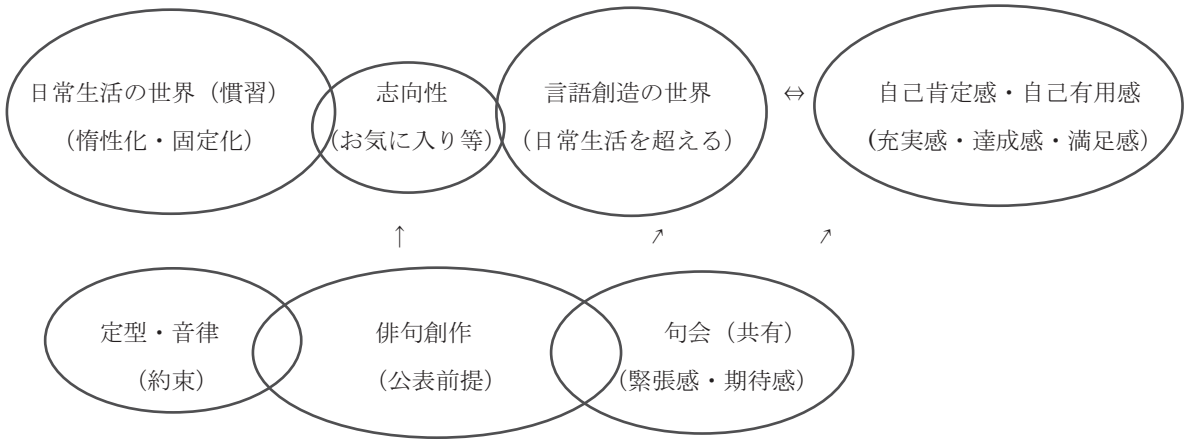
俳句というと、自由な気持ちでどう詠んでもいいということがよくいわれる。そうすると、そこには制御や限定、さらには方向性という作用は必要ないのか。

まず句作の対象となるものへの表現者の志向性、あるいは姿勢、スタンスが存在しなければならない。「適当」ではなく、詠者にとって唯一無二とまではいわなくても、それこそを言語として形象化したいという強い意欲が存在する必要がある。この「それこそ」を必死で探す行為がなければこの形象化の行為は形骸化を免れない。特別支援学校生徒の場合は、それがいわゆる「お気に入り」として把握されてくる。定型詩という枠を与えられることで、この「お気に入り」という感覚が言語化を容易にする。そして、音律というもう一つの要素がその背中をさらに押すことになる。「お気に入り」、場合によっては「一押し」、「推し」の感覚が俳句表現の第一歩になる。当然ながら、「お気に入り」をことばに表現することは「自慢」となり、「一押し」、「推し」は他者への強いアピールになる。それは俳句という言語表現の質にかかわっていくことである。よりよいことばを用いようと考えるより、「お気に入り」「一押し」「推し」をよりよく表現したいと願い、ことばを選択していく過程の方が自然である。そして、表現の過程を経て、一定の形を与えることに成功すれば、その充実感、達成感は、その言語主体、当該の創作者の自己肯定感、自己有用感を高めていくと考えることができる。

Ⅴ．俳句創作に関わる諸要素の関係図

1. 関係図

これまでの考察を集約し、図示してみる。要素を簡略に示すため、本来はすべて相互矢印（⇔）を用いて表すところを最も強い作用を単一の矢印で表現してある。この図の特徴は、最終的に言語主体、つまり俳句創作者の「自己肯定感・自己有用感」へとつながっていく点にある。



2. 図の説明

このように図示してみると、日常生活の世界への着目が、俳句という言語創造の世界を経て、最終的に自己肯定感・自己有用感につながっていくことが見て取れる。そこには、句会というライブの共有の場が必要であり、それに伴う緊張感・期待感が充実感・達成感・満足感を生む過程が伴っていることも見受けられる。だが、図示はしてみたものの、この図の中の「志向性」については、その存在を示したのみにとどまっている。人間は周囲に多くのものが存在するだけでは「志向性」を持つことはない。どうすればこの「志向性」が芽生え、言語表現（俳句創作）しようという強い意欲へと高まっていくのか。このことを認知特性という視点から解明する必要がある。この解明には理論的な追求と実際の句作における現れ方の両方からのアプローチが有効であろう。

Ⅵ.「認知特性」と「感受特性」

1. 認知特性の内面性

人間はおのおの異なる思考法、感受性を持つ。だが、それは内面的な活動であり、外見からほとんど理解することができない。生活を共にする家族やそれに近い友人関係などでは、ある程度の推測は可能かもしれないが、精度が高く、安定したものとはいいがたい。環境が著しく近い一卵性双生児であっても同様である。やはり、自分の思考した結果、感受し感得した世界を他者に適切に表現し、それが一定の期待通りに受け止められることによって初めて、伝えたいと願う相手や周囲に理解されることになる。

2. 認知特性と感受特性

一般的には、人間の異なる思考法、感受性の向く先とその志向は「認知特性」と呼ばれる。だが、周囲の事物、事象に対する感覚は「認知」という説明では、少しばかり違和感を覚える。それは「感受特性」と呼ぶべきものであると考える。もっとも、これは芸術創作における特性と考える方が自然である。言語の場合は文学創作、それも詩創作における特性に限定すべきであろう。この「感受特性」という表現は造語の域を出ないので、定義づけ的にはこのようになるとするにとどめ、従来の認知特性という語を用いることにする。この認知特性は、俳句の場合、短詩形の定型詩という条件のため、選び抜かれ、研ぎ澄まされたものとなる。公式的、楽天的な把握ではない。短詩という情報量の限定と詩という音律の確保を目標とすると、使用されることばは限定され、精選されざるを得ないからである。この俳句の条件的な特質が認知特性を強く発揮させる原動力となる。

Ⅶ. 俳句創作における認知特性の出現状況

1. 特別支援学校生徒の俳句創作作品の分類・分析

特別支援学校生徒の場合、一般校の生徒に比べ、認知特性は格段に強い。俳句創作における認知特性を事物、事象に対する執着としてとらえると、かなりの接近性、接着性をもってそれを発揮している。この考察の前提となった特別支援学校における俳句創作活動の記録を整理し、認知特性の傾向を把握した。2022 年から本年度の 3 か年にかけての実践なので、創作された俳句の総数は、545 句に及ぶ。これをすべてエクセルシートに入力し、季語（季題）別に分類し、分析していった。3 か年とも同じ季語を用いたこともあるので、通し番号は年度を超えて付していった。これらの俳句の特徴として、創作者本人の認知特性がまだ内面にとどまったまま、熟しきらず十分に言語表現されていないものも多い。したがって、分析可能な句について、つまり認知特性の志向がある程度把握できる句について分析を施した。全体の分量からして、与えられた紙幅には収まらないので、代表的なものを例示するに留める。創作者は便宜的にＡ～Ｖの記号で表してある。分析者は、当該の実践者でもあるので、創作態度も含めて分析してある。（院）とあるのは、本稿の共同執筆者である大学院生（坂野来夢・両角晶一郎）が担当した分析の部分である。☆（深田観察）は深田菜々子教諭による観察記録である。通し番号、季語、創作日、創作者記号、創作俳句の順に示している。

2. 季語別の俳句

（1）季語「鯉幟」の俳句

○8 鯉幟　R6. 5. 14　A　鯉のぼり　　風に向かって　　とんでいろ

（分析）▼（院）情景を想像することが得意だが、その表現にこだわりがあるらしく、一つ一つの表現について何度も書いては消してを繰り返している。他の生徒が俳句とは関係のないことをしている時には、「ちゃんとやろう」といった声かけを積極的にし、リーダーシップがある。

○14 鯉幟　R6. 5. 14　B　さみしいな　　年に一回だから　　こいのぼり

（分析）▼（院）「さみしいな」「いたい！」といった、ネガティブな情をよく表現する。「～な」といった表現の語尾や「！」記号からは、強い感情であることが読み取れる。また、何らかのこだわりがあるのか、1 つの作品だけを作って、2 作目以降は作らないということが常である。

○34 鯉幟　R6. 5. 14　C　こいのぼり　　めをかいてあげたら　　おおきいな

（分析）▼（院）同じ言葉を繰り返して書くことが多く、2 枚目の用紙でも同じ句を書くことがある。鯉幟句集では、同じ言葉を繰り返さずに、主題→起点→終点のように、出来事を一連の流れとして想像できている。これは他の句集にはない特徴であり、一概に認知特性による動作固定があるとは言えない。

○53 鯉幟　R6. 5. 14　G　鯉幟　　大きくて青くて　　こい色だ

（分析）▼（院）他の生徒と比較しても、話をし始めると色々と想像していたことを表現してくれる。感覚を「味はこい」と具体的に表現してくれたり、見たものの感想を言語化したりと、表現方法は多彩である。特に「きゅうり」のとげを「針」や「かいじゅうのつの」に【見える】と見立ての表現をしたことには、物を色々な角度から眺めようとする知的好奇心が強く表れていると言える。2 枚目以上書くことが常であり、活動自体への意欲も高い。

○123 鯉幟　R6. 5. 14　H　こいのぼり　　およいでいるな　　こいのぼり

（分析）▼（院）俳句の活動という中でも、用紙に絵を描こうとする。また、その絵の内容は、人形のヒレがあ

る女性の裸体であった。絵画表現に興味が強いように感じられ、絵の線画は綺麗なラインであった。だが、文字となると書き殴ったように形の歪さが出てしまうため、絵画表現と文字表現で集中度が異なる可能性もある。

○150 鯉幟　R6.5.14　H　こいのぼり　　栗花落カナヲの　　たん生日

（分析）▼（院）アニメのキャラクターを俳句と関連付けて表現することが多い。特に「鬼滅の刃」が好きなようであり、そのキャラクターのイメージカラーや誕生日を俳句のテーマから連想する。「鬼滅の刃」のキャラクターには、多く難読な名前が用いられているが、その名前を漢字で書けるように練習したそうであり、字そのものも丁寧である。好きなものを表現できるようにしていくということは、その表現自体の質の上昇に繋がるのではないか。

俳句の虚構性がよく現れている句が多い。8 の句は、命令形を使用した強い願望の作品である。また 34，53，123 は事実を詠んでいるように見えて、仮定形の使用や誇張表現、強調表現を用いて、「鯉幟」の世界を俳句によってより広げていることが見て取れる。認知特性として、自己の願望を対象に投影し、俳句表現している。

（2）季語「紫陽花」の俳句

○40 紫陽花　R6.6.6　D　あじさいは、　かわいい　きもちがでてる

（分析）▼（院）「きもち」「ながい」といった、一つの言葉を反復する傾向がある。読点を句の中で使ったのは、全3回の俳句教室の中で、この生徒だけである。また、その読点を打つ場所も、リズムの区切り方（「はっぱが、ある」）や主題の明示（「あじさいは、」「きもちは、」など）として、文法的に正確な位置である。俳句を一つの文章作成であると捉えている点で、文章構成力が高いことが伺える。ただ、終わり際まで寝ていることが多く、鯉幟句集の際は、一度も書かずに机に突っ伏していた。紫陽花句集からは、終わり際に起きて急速に書き始めるようになった。

○50 紫陽花　R6.6.6　E　ピンク　あじさい　けいけいけい

（分析）▼（院）音を鳴らすことに認知特性のある生徒である。俳句活動中も、小瓶やきゅうりを叩いて音を確かめていた。気に入った音があると、ずっと鳴らしてしまう。それをＡさんが止めるも、止めることなく集中している。いざ俳句を書き始めると、字を書くのは難しいようだが、句全体として意味が込められている感覚は伝わるような表現をしてくれる。

40 の句は、読点の使用という特徴をもつ。専門的な俳句ではこの手法が見られることがあるが、一般的ではない。とすると、40 の場合、Dが一種の強調表現として発露されたものとみることができるかもしれない。50 は、短詩形のリズムへの志向が強い作品である。認知特性として見ることができよう。

（3）季語「おたまじゃくし（略称「おたま」）」の俳句

○533 おたま R5.6.8　U　おたまくん しっぽかわいい かわいいな

（分析）▼（院）おたまじゃくしの見た目について俳句にしている。

☆（深田観察）・長い間おたまじゃくしを眺める。はじめは「口が気持ち悪い」と言っていたが、おたまじゃくしの口に水槽越しに指を重ねて、ときには指で優しくトントンしながら、長い間眺めていた。「そろそろ書いてみようか」の声かけで席に戻る。「家に百人一首があるから（書き方が）わかる」と言っていた。「最後は決まっている」と言い、「かわいいな」をまず書いた。その後、真ん中の 7 文字が思いつかず、もう一度水槽を見に行った。いろいろな角度から眺めていた。最終、真ん中にも「しっぽがかわいい」というような一文を入れていた。

深田の記録から創作過程が精細に理解できる。観察及び主体的な働きかけの中で俳句として表現したい内容とことばが決まっていったようである。この実践では、おたまじゃくしの実物を水槽に入れて持ち込み、生徒たち

に観察を促した。どの生徒も強い興味を持ち、一定時間観察を続けていた。観察と発見が言語創造へ向けられたとき大きな力を持ったことが見受けられた。

3. 個別の作者の俳句

（1）Rの俳句

○440 バレンタイン　R5.2.9　R　あげようか バレンタインは 命題だ

○442 新年　R5.1.26　R　正月の りょうりのはおう おせちだね

○444 秋桜　R4.10.6　R　コスモスは しきさいはなつ ジュワユーズ

○447 つき　R4.9.15　R　月もよう しんそうしんり があらわれる

○449 あせ R4.8.24　R　放置した ペットボトルは 汗をかく

○451 ひまわり R4.8.23　R　ひまわりはたねのもようは 黙示録

（分析）▼（院）難解な漢語を使用する傾向がある。「黙示録」「飛竜乗雲」。▼俳句的な連続性を無視した表現を用いることができる。

Rの句を6句並べて分析すると、Rが持つ認知特性が明確に見て取れる。これまでもこのような概念語の使用はあったようだが、これほど頻用されることはなかったということである。俳句という短詩形の定型詩という枠組みの中で自己解放的に高い自由度を持ってこの種の表現を使用していると見られる。ちなみに451の「ひまわりのたねのもようは黙示録」は、一般の俳句コンクールの高校生の部の優秀賞（最優秀賞に次ぐ賞）を受賞した。俳句表現の質的に高く評価された句である。なお、このときの最優秀賞も特別支援学校の生徒の作品であった。この二例だけで判断するのはやや危険だが、短詩形定型詩の俳句は知的障碍のある生徒には適していて、一定の質の表現を行うことが可能なことを示していると見ることもできよう。6)

（2）Cの俳句

○31 七夕 R5.7.6　C　たなばたや おひめさまと おうじさま

（分析）▼（院）句題から連想した単語を並べて俳句にしている。▼好不調の波が大きく、句意の鮮明なものと不鮮明なものの両方が見られる。▼認知特性（志向性）については、俳句創作以外の活動も取り込んで分析する必要がある。

☆（深田観察）織姫と彦星のイラストを見て、「おひめさま」とつぶやく。「書こうか」と言うと「書いて」と言ったため、深田がシートに記入。「こっちはだれ？」と深田が彦星を指さすと、「おうじさま」と答えたので、そのまま深田が「おうじさま」と記入した。

31の句についても、深田の精細な創作過程の記録が残されている。この実践では、パワーポイントでさまざまな七夕の図やイラストを映し、それをプリントにして配布して創作意欲を喚起した。織姫と彦星の関係性を把握し、俳句に反映させた例としてみることができる。

Ⅷ. 結語―俳句創作における認知特性の考究

1. 成果

成果として、まず特別支援学校生徒の視点を中心に俳句創作の特徴を分析し、その教育的価値を考察したことが挙げられる。日常性、共有、志向性、言語創造などの語を用いて、関係図の作成を試み、最終的に自己肯定感・自己有用感の向上に資するという仮説的な構造を構築することができた。本稿の目的としている特別支援学校生

徒の自己肯定感、自己有用感の低さを解決する有力な手段となり得ることを一定レベルで証明した。

また、認知特性として、創作された俳句に内在する志向性の分析及び創作過程の観察記録からごく一部分ではあるが、認知特性が顕著に働く例を取り上げて、一定の有効な説明を行うことができた。これは、半ば試行的な段階であり、今後認知特性の働きをとらえる指標を作成し、それに当てはめて一定の合理的な説明を積み重ねていく必要がある。その仮説的な意味としてもこの分析は有益なものと考えられる。

2. 課題と展望

課題は山積しているが、このような創作活動の学習的な意味を考察するためには事例分析を積み重ねていくしか方法が見当たらない。まず俳句作品の優劣を考えずに、創作された作品を全面的に評価する方向で分析を進めた成果はあったが、あらかじめ分析の視点を用意しきれなかったため、恣意的な分析結果に陥ったことは否めない。今後その整理も含めて、分析結果の記述方法を開発していく必要がある。また、創作者である生徒の特性についても的確に把握することが大変困難であり、まずは、創作姿勢、態度、行動を見とり、そこに積極的な意味を与えることを試みた。それなりに功を奏したように見受けられるが、見とりにおいて、解釈の深浅が出てしまい、分析結果の信頼性を十分に担保することができなかった。この点も今後の改善点と考えられる。

展望としては、実践の手ごたえ・感触として、創作意欲が高まってきていることを感じ取っている。特別支援学校生徒の場合、アンケートなどでそれを証明することは難しいが、現象的な側面の精細な記録とその分析次第では明らかにすることは不可能ではないと思われる。現時点では、この俳句創作に参加した生徒の自己肯定感・自己有用感が高まっているという観察結果をよりどころにして、この種の創作活動が精神的な安定や向上につながることをさらに考究していき、新たな研究の地平を開きたいと考えている。これをもって今後の展望としたい。

3. 本稿の分担

全編にわたって植山が記述を担当した。その中に、深田が担当した創作活動の記録と、また坂野と両角が担当した俳句作品の認知特性の分析を用いている。

＜謝辞＞

本研究をまとめるにあたって、ご協力、ご支援を賜った京都教育大学附属特別支援学校に感謝申し上げます。

＜引用文献＞

1)植山俊宏・大西諒子(2023)「大学・附属特別支援学校連携による俳句創作実践プロジェクトへの参与型現職研修に関する研究」『京都教育大学教職キャリア高度化センター研究紀要』第 5 号/pp.89-98

2) 植山俊宏、深田菜々子、杉山瑞葵(2024)「特別支援学校における協同的体制による俳句創作指導に関する研究（１）ー授業研究、学習者研究、教員研修研究の複合的方法による実践研究ー」『京都教育大学教職キャリア高度化センター研究紀要』第 6 号/pp.21-30

3)岡本夏木(1982)『子どもとことば』岩波書店/pp.195-197

4)池上嘉彦(1984)『記号論への招待』岩波書店/pp.3-4

5) 4)pp.4-5

6) 丹波市俳句協会・たんば青春俳句祭実行委員会(2022)『第 22 回たんば青春俳句祭作品集』

＜参考文献＞

坪内稔典(2010)『増補坪内稔典の俳句の授業』黎明書房

坪内稔典(2018)『小学生のための俳句入門　君もあなたもハイキング』くもん出版

本論文は、科学研究補助金基盤研究(c)「国語科教育における「個別最適化」対応のための指導過程の再検討に関する調査的研究」（課題番号 22K02491）の成果の一部である。